

中近世移行期における淀川流路の変化

―岡・禁野・磯島周辺を対象に―

馬 部 隆 弘

はじめに

二〇一九年二月に、筆者は文献史学の立場から北河内の地域社会を分析した拙著を上梓した^①。このように極めて限られた範囲の、しかも中世史を対象にするとなると、史料的な限界も自ずと出てくる。そこで拙著では、城郭の縄張図を作成したほか、地籍図や絵図と現地を重ね合わせるような歴史地理学的手法も援用しながら、地域の姿を総合的に復原するよう心掛けている。逐一引用はしていないが、発掘調査報告書にも関係する範囲で全てに目を通した。いわば、文献史料の限界を自覚したうえでフィールドワークに根ざした研究になったと自負している。このような研究の道を歩んできたため、隣接する学問分野とどのように接するべきかという点も、常日頃から考えてきたつもりである。

先日、その拙著を読んだという考古学を専門とされる行政管理職の方から、突然の電子メールをいただいた。拙著でも頻繁に引用している『私心記』のある一文について、筆者はどのように解釈しているのかという問いであった。『私心記』とは、蓮如の息子で、永禄二年（一五五九）末から亡くなる永禄七年まで枚方寺内町に拠った実従の日記である。拙著では、枚方寺内町も対象としているので、質問してきたのであろう。

その場で何度か意見を交わすなかで、地域史を研究する際の隣接分野との関係について、改めて考えさせられることがあった。電子メールでのやりとりを公表するのは難しいかと思われたが、自説への絶対の自信を持つという質問者から、その主張を口外してもよいとの許諾を幸いにも得ることができた。そこで本稿では、右のやりとりを通じて筆者が考えたことについて述べて、拙著の補論に代えたいと思う。

また、そのやりとりのなかで、北河内の地域史に関する常識と想っていたことが、実はそうではない場合もあると気付かされた。具体的には、淀川と天野川の合流点付近における中世の地形についてである。拙著では、執筆当時に常識と思い込んでいたことは当然ながら叙述していない。当該地域の旧地形をより詳細に復原する作業も事前に進めていたが、常識の延長線上にあるようなことは不要と判断して、拙著には反映させなかった。そのため、それらを補えば、拙著を理解するうえでの補助にもなるであろう。これが、本稿執筆のもう一つの動機である。

一 「金屋」の所在

筆者がうけた質問の主旨は、『私心記』に二回みえる「岡・金屋」という記述の解釈についてであった。これについて質問者は、近世の河内国茨田郡枚方

村に在住した鋳物師の田中家だと解釈しているそうである。⁽²⁾その根拠は、金屋
「カナヤ」といえば、鋳物師を意味するからというものであった。なお、枚方寺
内町の範囲は近世の枚方村とおよそ重なるが、岡村は寺内町の外にあたる。と
ころが、田中家は枚方村のなかでも岡村に近接するところに立地するので、こ
れも右の説の一つの根拠となるらしい。質問者は、この説を近く市民向け講座
にて開陳することであった。

たしかに、かつて蘭田香融氏は、『私心記』に登場する「金屋」をカナヤと
読んでいた。⁽³⁾それに対して『枚方市史』では、「金屋」を河内国交野郡禁野に
比定し、「禁野」と傍註を振っている。⁽⁴⁾つまり、キンヤという読みを与えたわ
けである。それ以後の研究においては、専ら後者が踏襲されてきた。⁽⁵⁾「金屋」
を禁野に比定する論証過程が明文化されたことはないが、『私心記』では「金
屋」が三例あるので並べてみたところ、文献史学をそれなりに修めた者なら
ば、おそらく誰しもが同じような論証をすると思えた。そこで、その内容を次
のように質問者に対して回答した。

まず、一例目として「岡・金屋へ出候テ大塚衆鶉打候、見物候」とみえる。⁽⁶⁾
ここでは「岡・金屋へ出候テ」と表現していることから、「岡」と「金屋」は
地名と考えられる。この点は、現在でも「梅田へ出る」「渋谷へ出る」など
という用法はあるが、「コンビニへ出る」「銀行へ出る」とは言わないのと同様で
ある。よって、「金屋」を工房のような施設と捉えるのは厳しい。

二例目は、「照提へ行、金屋・ナキサ・一宮見物次也」という事例である。⁽⁷⁾
「照提」は、枚方と同じく寺内町の招提を指していることは明白である。招提
寺内町は近世には招提村となり、「ナキサ」は渚村となる。また、「一宮」は近
世の坂村に該当する。⁽⁸⁾【図】にも示したように、近世村でいうと、禁野村・渚
村・坂村を通過して招提村に行くのは至極真っ当なコースといえる。「岡・金
屋」や「金屋・ナキサ・一宮」と並記する際に、工房と地名が混在することは
通常では考えられない。よって、「金屋」は禁野という地名と考えてほぼ間違

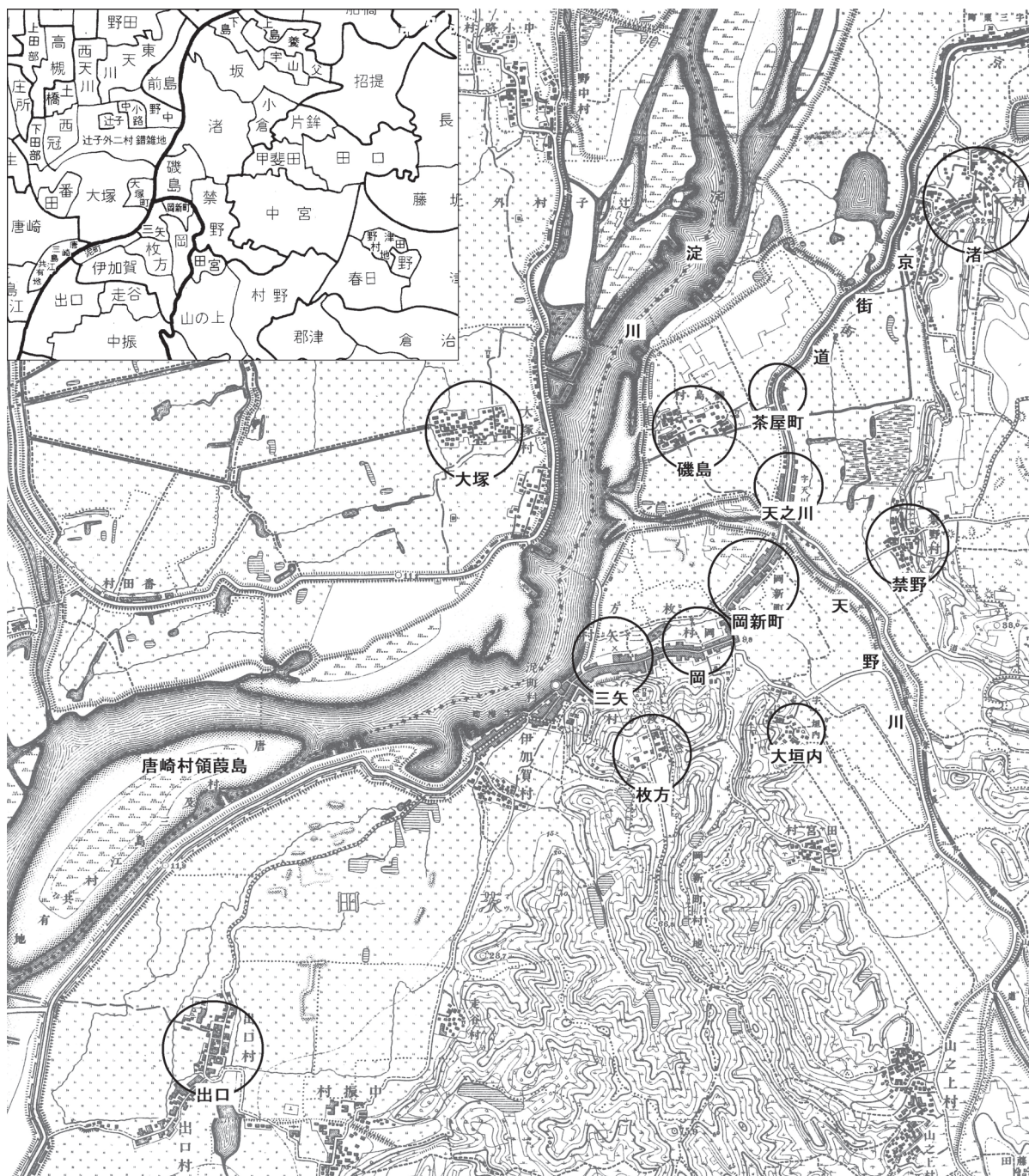
いない。

そして最後に、「光善寺飯相伴、汁一菜三、其後岡・金屋見物候而、出口へ
送候」という事例がある。⁽¹⁰⁾「岡」と「金屋」を並記していることから、近世村
レベルの地名が並ぶというこれまでの推測が裏付けられる。また、実従クラス
の者が、実玄のような客人を伴って工房見学などすることはない。実際、庶民
の生活そのものを、実従自ら赴いて覗きに行った事例は他にない。実従が記す
「見物」の対象は常に景観や行事で、仮に庶民の様子をみたとしても「町見物」
と景観に留めている。⁽¹¹⁾子孫も目にすることを想定した日記の史料性格を踏ま
えるならば、仮に興味本位で見物したとしても、自らの家格を顧みない行為を
表立って記すはずがないのである。

一例目に基づく大前提、二例目に基づく小前提で、いわゆる三段論法にお
ける結論はほぼ出すことができるが、さらに三例目で完全に裏付けがとれる。
よって、「金屋」が鋳物師である可能性は0%だと筆者は回答した。

これで事は解決したと思いきや、質問者は、田中家が近世に「金屋」と呼ば
れていることや同家の前の坂が「金屋坂」と呼ばれていること、全国的にみて
鋳物師のいるところに「金屋」という地名が多いことから、枚方でも「金屋」
という地名が自然発生しているはずだと主張してきた。つまり、工房から地名
に解釈を切り替えてきたわけである。枚方村と岡村の境界付近にある田中家
は、枚方寺内町の出入り口にあたるので、実従は「金屋」という地名を通過し
て寺内町の外へ出て行ったのだという。

それに対して筆者は、実従は寺内町の外へ出る際の行路に、寺内町内部の地
名は記さないと回答した。そもそもそのようなことを記す必要性がないし、む
しろ重要なのは行き先である。例えば、京都の四方八方で、京都へ向かう街
道が全て「京街道」と呼ばれるのと同様に、前近代の地理感覚は現代のよう
に相対化されておらず、自らがいる場所を中心に行き先を重視する傾向にあ
る。したがって、実従も寺内町の外に出るときには、寺内町に外接する地名を



【図】枚方周辺地形図

仮製二万分一地形図および『大阪百年史』付図に加筆

用いる。例えば、「岡口」や「三屋口」など、枚方村に外接する岡村・三矢村などの近世村レベルの地名に「口」を付ける事例があげられる。⁽¹²⁾もししくは、寺内町南側の「高ツカ」(現在の鷹塚)のように外接するランドマークを用いている。⁽¹³⁾

一方の田中家は、平野部で寺内町外部にあたる岡村ではなく、台地上の枚方村に居住している。つまり、地形的にみて枚方寺内町の内部に住んでいることは明白である。実際、豊臣期の鋳物師は「枚方寺内」に居住していると自覚している。⁽¹⁴⁾さらに、実従は鋳物師のことを「吹屋」「フキ」と表現しているので、⁽¹⁵⁾実従が記す「金屋」はそれとは別のものを指していると考えるのが妥当である。そもそも、坂の名前と近世村に連なるような地名が並記されるようなことはほとんどない。以上の点から、仮に「金屋」という地名が当時の寺内町内部にあったとしても、出口として表現されることはありえないと回答した。

さらに親切心から、中世の日記の

解釈の仕方について事例を用いながら説明してみた。例えば、豊臣秀吉の知行宛行状や「足利季世記」では「キンヤ」と表記されているように、⁽¹⁶⁾禁野という地名は耳で聞いただけでは即座に漢字が浮かびにくい事例といえる。中世の日記では、そのような地名は仮名で表記するか、あるいは漢字で宛字するのが常である。枚方寺内町に入ってからまだ聞かない実従が、キン・ヤという聞き慣れない地名を聞いて漢字を宛てるとしたらどうするだろうか。なお、ヤについては、前記のように実従が三矢の地名を「三屋」と表記してくれているので、その解答はすでに出ている。そのため、キンと聞いて最初に思い浮かぶ漢字を周囲の方々に尋ねてみればよいのではないかと提案した。

加えて、文献史学における研究の積み重ねを説明し、あえて逆戻りの解釈をするのならば、まずは研究史の問題点を指摘するのが筋だと指摘した。もう少し具体的に言うならば、上述の三段論法を否定できないのであれば、逆戻りの解釈はできないということである。このように研究史と真摯に向き合うことを出発点としなければ、考古学を含む人文学は存立しえないとも指摘した。

ところが今度は、岡に住んでいる鋳物師の居所が地名になったと質問者は主張し始めるのである。岡に鋳物師が住んでいた証左など何一つないのに、住んでいたかもしれないという自らの主張を繰り返すのみであった。あるいは、「金屋・ナキサ・一宮」のように並記される地名は、近世村という同じレベルの地名である可能性が高いという国語学的方法論で改めて突き返しても、「金屋」という地名の可能性もあると返ってくる。仮に岡のなかに「金屋」という地名があったとして、そこを通ったとしても、実従はその場所を「岡口」と表記するはずなのだが、「高ツカ」の事例があると反論してくる。いうなれば、岡にある「金屋」という架空のランドマークが実在することを前提として、話を進めるのである。これでは議論が成立しない。

それどころか、「金屋」という漢字の読み方を周囲の人物に聞いても皆がカナヤと読んだと、筆者の提案の意図も全く理解できていない様子であった。つ

まり、実従の立場に立って『私心記』を読むことが、どうしてもできないのである。

二 天野川の河口

そのほか質問者は、実従のいう「金屋」が仮に禁野だとしたら、具体的にどこを指すのかと質問してきた。前掲の事例では、「岡・金屋」から淀川対岸にあたる大塚での「鶉打」の様子を見物している。禁野からは遠くで見えるはずがないので、「岡・金屋」つまり岡の鋳物師宅あたりに違いがないのである。かくして、鶉がみえるから枚方寺内町よりも対岸の大塚に近い岡に鋳物師が居住していたと、議論は飛躍をする。

そこで筆者は、中世に岡・禁野といえは天野川の河口で、淀川との合流点だと回答した。ここならば淀川対岸の大塚の河原がよく見えるはずだし、舟を出してより近くでみることも可能である。

すると質問者は、禁野が淀川に接していないことや、天野川の河口が岡と磯島に挟まれていることは、地図をみれば一目瞭然であると返答してきた。したがって、禁野から鶉はみえるはずがないというのである。そして、筆者の考えは、地図すら見ない、地に足が付いていない机上の空論だと、手厳しい言葉も浴びせてきた。考古学のほうが文献史学よりも地に足が付いているという古典的な理解のもとで、自らの優位性を主張してきたのである。

たしかに拙著では、机上で中世の地形にできる限り近づこうと努力している部分も多いが、当然のことながらその作業の前提としてフィールドワークを繰り返している。縄張図も、その一環で作成したものである。このような拙著の意図は、序章をはじめとして至るところに明示しているので、よほどのことがない限り理解できないということはない。おそらく、実際には拙著にほとんど目を通していなかったであろう。このような態度からも、隣接する学問分野

との接し方を知らないということがよくわかった。

【図】に示したように、明治期の天野川河口は、質問者の言うとおり岡と磯島に挟まれている。これを見る限り、禁野の集落から大塚を見通すことは、距離の面だけでなく地形の面でも難しく思える。質問者が「金屋」を禁野と解釈する説を受け入れがたい理由の一つは、ここにもあるらしい。

たしかに、該当部分の地形が中世から現在まで変化していなければ、右の理解も成り立つかもしれない。実際、磯島が淀川左岸に立地する状況は、慶長一〇年（一六〇五）の摂津国絵図でも確認できる⁽¹⁷⁾。しかし、あくまでもそれは近世以降の地形であって、以前も指摘したように、中世には磯島がまだ淀川に浮かぶ川中島であった⁽¹⁸⁾。その様子は、他ならぬ実徒が、桜青葉を見物するためや鳥を捕るために、磯島まで度々舟で赴いていることから窺える⁽¹⁹⁾。かつての禁野が淀川に面していたことも、「禁野関」という川関の存在から明らかといえる⁽²⁰⁾。したがって、岡・禁野が天野川の河口にあたるはずである。筆者はこのことを、少なくとも淀川流域や北河内を研究対象とする者の間では常識だと思っていたのだが、そうではなかったことに正直なところ驚きを隠せなかった。

実をいうと、中世から近世にかけての磯島の地形に関する論考を、拙著の準備過程で半ばまで用意していた。しかし、行論上とくに必要とされる問題ではないし、常識の範疇なので結局は盛り込まなかった。というのも、磯島を川中島とする説は、近代以降の諸書にすでに散見するのである⁽²¹⁾。それどころか、文政一〇年（一八二七）に没した浜松歌国の著書に、「往古淀川東に流れ、磯島の東を廻りて、又西に流れ南に通ずる川筋故、川ゆがみて水道あしきとて、磯島の西を掘て、淀川を直に南へ通ず⁽²²⁾」とみえる。同様に文久元年（一八六一）発行の地誌にも、磯島村は「摂州嶋上郡二属す、是ハいにしへ西の岸摂州二つゞきたりしが、淀川の流れかわりしニより河州の方へ交ることくなれりとぞ⁽²³⁾」ともみえる。磯島が摂津国島上郡と陸続きとされ、必ずしも川中島とは認識されていないが、かつて磯島と禁野の間に淀川が流れていたという理解は、早く

近世には存在していたのである。

とはいえ、常識ではないことが判明した以上、このまま説明を放置しては怠慢との誹りを受けかねない。そこで、筆者が常識と思い込んでいたことや拙著の準備過程で省略した記述を、改めて文章化しておく意義も多少はあるだろうと判断した次第である。以下では、まず中世における天野川河口の所在について、より具体的な場所を措定しておきたい。

文禄年間（一五九三―九六）に豊臣秀吉が築かせた淀川の堤防を文禄堤という。よく知られるように、この堤防上は、大坂と京都を最短距離で結ぶ京街道としても活用されたため、「堤ノ道」とも呼ばれている⁽²⁴⁾。土木事業を得意とする秀吉は、治水対策と交通対策を一挙に解決してしまったのである。江戸時代になると、淀川の堤防は一国平均役で維持される国役堤として扱われる。本来は文禄堤が国役堤であったと思われるが、堤外地の開発が進んだ場所では、文禄堤上を走る京街道と国役堤が分離するようになる⁽²⁵⁾。

それを前提とすると、京街道が中世最末期の淀川沿岸をかなりの度合いで反映していると考えられる。つまり、天野川の流路のうち、京街道と交差する部分が中世における淀川との合流点ということになる⁽²⁶⁾。【図】にも示したように、この部分の天野川左岸は京街道上に街村状に延びる岡新町村、そして右岸も同様の天之川町となっている。前者は、その名からして明らかに岡村から分立した近世村なので、中世には岡といつてよからう。後者は、禁野村の出郷である⁽²⁷⁾。よって、中世には岡・禁野といえは天野川の河口を意味するのである。

なお、天正一五年（一五八七）に九州へ下向する楠長諸が、その途上で和歌を詠んでいるように、天野川は「古今和歌集」や「伊勢物語」にも登場する京坂間随一の景勝地でもあった⁽²⁸⁾。実徒も、その事実はおそらく知っていたに違いない⁽²⁹⁾。にも拘わらず、『私心記』には天野川を見物した旨が一切記されない。しかし、「岡・金屋」が天野川河口を意味するとなれば、この疑問も解決する。実徒が「岡見物」している事例なども、それに類するものかもしれない⁽³⁰⁾。

一方、磯島村は文祿堤の堤外地にあたるので、禁野と磯島の間には淀川が流れていた可能性が高い。磯島は現在は淀川左岸に位置しているが、先述のように近世には摂津国に属していたこともその証左となる。明治七年（一八七四）に、磯島村が摂津国島上郡から河内国交野郡に編入され、ようやく名実ともに淀川左岸に組み込まれるのである。⁽³¹⁾ 平安期まで遡るが、淀川を航行する紀貫之は、現在では河岸から随分離れたところにある渚院（枚方市渚元町）に咲く梅の花を目にしている。⁽³²⁾ この一例からも、かつての河岸は、現在よりも東にあったことは間違いあるまい。

以上が、筆者が常識だと思っていた内容である。ただし、右の説は、次の点においてなお議論を整理する余地がある。すなわち、磯島の東側から西側に流路が変わったという近世の説から、二つの流路に挟まれた川中島という近代以降の説に変化したように、磯島西側の水量は無視したいということである。換言するならば、地形的にみて磯島と大塚の間のほうが本流で、すぐに埋まってしまうような禁野との間は支流と考えるのが自然なのではなからうか。ところが現状の説明では、禁野との間に国境となる本流があり、大塚との間は支流という扱いになっている。この矛盾を解決すれば、磯島と禁野の間に淀川が流れていたという説も、より説得的なものになると思われる。そこで、磯島の景観がどのような変遷をたどってきたのか、文献史料からもう少し補説しておきたい。

三 磯島という川中島

磯島村は、大きく上島と下島に分かれており、このうち西側にある下島が本郷であった。⁽³³⁾ 東側の上島は、文祿堤と重なることになったため、近世には京街道沿いに街村を形成し、磯島村の出郷として茶屋町と呼ばれるようになる。

磯島村は、武家ではなく大部分を公家の日野家領と石清水八幡宮領が占める

という、所領構成の面でもやや特殊な村落だった。⁽³⁴⁾ このうち石清水八幡宮領が生じた一つの契機は、文祿三年（一五九四）の豊臣秀吉による知行替えにあると思われる。⁽³⁵⁾

日野家が磯島村のうちに所領を抱えていたことを確実に示す史料の初見は、慶長六年（一六〇一）である。⁽³⁶⁾ ただし、文明一四年（一四八二）には、対岸の大塚荘が日野家領であることを確認できる。⁽³⁷⁾ さらに天正一六年（一五八八）の一柳越後守書状によると、「大塚内日野殿御分葭原」を知行していることも確認できる。⁽³⁸⁾ この知行分は、文祿四年の増田長盛等連署安堵状にも、「於摂州日野殿御知行葭嶋」としてみえる。⁽³⁹⁾ 一連の史料にみえる大塚荘内の葭島は、元和三年（一六一七）九月一日付の徳川秀忠朱印状にて「三百五十六石 磯嶋」の左に「大塚村葭嶋」と傍註があることから、⁽⁴⁰⁾ のちの磯島村という分離独立した村として扱われるようになったとみてよからう。

ただし、「磯嶋」という島の存在そのものは、鎌倉末期から南北朝期にかけて活躍した浄土真宗僧の存覚の動向からも確認することができる。幼少期に青蓮院門跡の院家である心性院の経恵に病を治してもらった存覚は、師弟となる約束をし、一五歳になった嘉元二年（一三〇四）に経恵が抱える磯島の引接坊に入った。⁽⁴¹⁾ なお、経恵は日野家出身の円弁の子で、日野家傍流にあたる広橋経光の養子となった人物である。⁽⁴²⁾ つまり、日野家と磯島の関わりはこれ以前に始まる可能性もある。また、日野家と浄土真宗の関係については言及の必要もあるまい。嘉元二年のうちに、経恵の推挙で尊勝院玄智のもとに入室して以降、存覚と磯島の関わりはしばらく確認できないが、貞和二年（一三四六）には磯島を訪れて別時の報恩講を修しているほか、観応元年（一三五〇）にも磯島に投宿している。⁽⁴³⁾

淀川の葭島は、もともと明確に国境の線引きができるような存在ではなかったようである。【図】のように、摂津の唐崎村領に含まれる葭島も、河内側にあたる出口村の目の前まで迫っている。一方の出口村も、戦国期から「川開」

を進めていた。⁽⁴⁴⁾ 出口村における文祿堤は、もともと集落部分を囲うようにめぐっていたので、【図】をみる限り相当な部分の中洲を開発して摂津側に進出したことが窺える。こうした関係にあったため、近世初期には出口村が唐崎村の葭島を侵害したとして訴訟問題にもなった。⁽⁴⁵⁾ この訴訟は、最終的に「如前々唐崎領ニ被申付」という結果になっている。右のように、葭島部分の国境は、両岸からの開発のせめぎ合いによって決したようである。

それに対して磯島部分の河内側は、神聖な場で殺生が禁じられるなど、表向きは積極的に手が加えられない禁野であった。⁽⁴⁶⁾ したがって、摂津側から大塚荘が拡大する形で、一方的に開発が進められたのではなからうか。その結果として、水量が多くて河川としては本来の本流にあたる大塚と磯島の間が支流扱いとなり、水量の少ない磯島と禁野の間が国郡制的には本流になるという逆転現象を起してしまったのであろう。

以上の説明で、前章末尾で指摘した矛盾はおよそ解決したと思われる。それだけでなく、上述の説明を援用すると、『私心記』にて「岡・金屋」という記述が重ねて登場する理由も浮かびあがってくる。

禁野村のもう一つの出郷である大垣内は、天野川左岸に位置する。⁽⁴⁷⁾ このように、近世の天野川河口付近では、岡新町村と禁野村が若干錯綜していた。ここから推するに、河川整備がなされる前の中世は、近世段階よりも川幅が広く、淀川と同様に中洲が点在していたと思われる。そこでのそれぞれの土地の所属も、淀川と同じく開発主体によって決していたと想定される。よって、村切がなされる以前の中世には、近世段階よりも複雑に錯綜していたか、もしくははいずれにも属さない未開発の土地が広く存在していたのではなからうか。⁽⁴⁸⁾

「岡・金屋」という地名の並記は、右のような状態にある天野川河口部分を表現したものとみることができる。実従は、招提へ赴くに際し岡も経由したと思われるが、この場合は行き先たる天野川対岸の禁野から順に通過する地名を列記する。それに対して天野川河口周辺が目的地になると、「岡・金屋」と並

記してはやかした表現となるのも、境界が明確に引けない土地だと考えれば納得のいくものとなる。

続けて、文祿堤成立直後における磯島の景観を文献史料から可能な限り読み取っておきたい。磯島村の村高は、前述した慶長一〇年の摂津国絵図に四七二石五升四合と記されるものの、元和三年頃の郷帳では四五〇石三斗と大幅に減少している。⁽⁴⁹⁾ さらに正保三年（一六四六）頃の状況を示す正保郷帳では四四九石、そして慶安四年（一六五一）には四三〇石四斗六升三合と立て続けに減少する一方、それ以降は幕末まで変化がない。⁽⁵⁰⁾ ここから、文祿堤の成立によって景観の変化がもたらされるも、村高が確定するまでの一七世紀前半の間に、磯島村ではさらなる景観の変化があったと想像される。なお、慶長一〇年の摂津国絵図では、現状と同じく淀川左岸に完全に組み込まれた形で磯島村が描かれるが、該当部分は正保元年に作成が始まる正保国絵図から写された可能性が高い。⁽⁵¹⁾ ゆえに、この絵図は必ずしも文祿堤成立直後の景観を反映しているとはいえない。

そこでとりあげたいのは、京都賀茂の海蔵院と摂津住吉の慈恩寺を管掌する鶴峯宗松の日記である。鶴峯は、日野輝資と親しく接しているため、後述するように両寺院を往復する際に頻繁に磯島に立ち寄っている。彼の日記には、慶長四年から一五年にかけて磯島の記述が多数みえるが、⁽⁵²⁾ 磯島の歴史を語るうえでこの史料が活用されているとはいいがたい。そのため、やや丁寧にここから磯島に関する情報を読み取っておく。

まずは、磯島へ出入りする際の行路について確認しておきたい。鶴峯が磯島に出入りする前後には、守口・出口・枚方・橋本・淀・下鳥羽など、淀川（桂川）左岸を常に経由している。⁽⁵³⁾ また、馬で上洛したのちに船で下向する場合は、住吉まで従者に馬を引かせている。その際、馬は必ずといっていいほど、磯島に立ち寄って休息している。⁽⁵⁴⁾ さらに、「徒歩ニシテ赴磯島也」という事例や、磯島から「一里ホト徒歩ニ而行」ったのちに乗船し淀まで赴いている事例

もある⁽⁵⁵⁾。以上の例から、慶長期の磯島は、すでに淀川左岸と陸続きであったか、あるいは橋で繋がっていたはずである。その一方で、「自嶋出」「在島」「出嶋」「入嶋」という表現が幾度となく登場するように、磯島は島としての景観をなお残しているように見受けられる。実際、磯島に船で上陸することも度々あった⁽⁵⁷⁾。また、磯島八幡神社にあったと思われる「観音堂」から「遠見」をしているのも、現在は内陸の集落部分にある同社がかつては河岸にあったことを示唆する⁽⁵⁸⁾。しかれば、「岡・金屋」からの遠望も、現在より利いたことであろう。

鶴峯が、磯島に立ち寄る際の宿所も定まっておらず、甚右衛門もしくは左介の「私宅」であった⁽⁵⁹⁾。両者は名字こそ記されないものの、ともに「内衆」を抱えていた⁽⁶⁰⁾。その総数は不明だが、左介が一人、内衆を引き連れて堺まで下向している事例が確認できるほか、甚右衛門の内衆も少なくとも二人はいる⁽⁶¹⁾。

両者は輝資の供をつとめるなど、日野家に仕えていたようである⁽⁶²⁾。そのため、同家領にあたる大塚へも度々赴いている⁽⁶³⁾。磯島で酒が不足したときに大塚へ取りに行っているように、両村の間柄も近かった⁽⁶⁴⁾。また輝資も、京都と大坂を上下する際に幾度となく磯島を訪れている⁽⁶⁵⁾。磯島は、公家衆なども訪れるサロンとしても機能していたようで、屋形舟による接待なども両者の重要な役割であったようである⁽⁶⁶⁾。

そのような文化的サロンとしての性格は、戦国時代まで遡りうるのではないかと考えられる。わずかながらではあるが、最後にその例証をいくつかあげておきたい。

永禄三年（一五六〇）二月に実従は、磯島の糸桜を見物した⁽⁶⁷⁾。このとき、「浄教門徒」の「磯嶋衆」から樽酒と食籠の提供を受けている。このように、中世の磯島には、すでに「磯嶋衆」と呼ばれる一団が居住していた。先述のごとく、五月には桜の青葉も見物しているように、磯島は風光明媚な桜の名所であったようである。また、磯島と浄土真宗の関係がさらに遡れることは、先述した存覚の事例からも明らかである。

別の事例もみておきたい。天文八年（一五三九）三月に、石清水八幡宮の俗別当が室町幕府に証拠書類を提出して、河内北端にあたる楠葉のなかの土地支配権を保証してもらっている⁽⁶⁸⁾。ところが七月になると、同じく石清水八幡宮の善法寺が、その土地に対する支配権を主張しはじめる。再審の結果、三月に俗別当が提出したのは偽文書であったことが判明し、土地は善法寺に返付された。この偽文書を俗別当と共謀して作成したのが、磯島の住人と思われる磯島越前入道であった。偽文書とはいえ、一度は幕府の審議の目を騙したところからみて、精巧にできていたことは間違いない。逆説的な事例ではあるが、そのような偽文書は相当の知識がなければ創れないので、戦国期の磯島には文化的素養が根付いていた可能性がある。

文化といえば、狂言にも着目したい。現在、狂言には大蔵流と和泉流があるが、江戸時代にはこれに鷺流を加えた三つが主な流派であった。鷺流は、鷺仁右衛門宗玄という人物が、徳川家康に気に入られて一代にして流派を確立するが、明治時代に入ると庇護者を失い一気に廃れてしまう⁽⁶⁹⁾。その宗玄の出自は次のようなものであった。

我親の語りしハ、鷺ハ異名にて、本名字ハ長命也、今の次良太夫、おうちの子かたになりて、名字をもらふ、鷺といへるハ、仁右衛門親、摂津国磯嶋と云在所に住し、生れつき首ながくして、水辺に住ほどにとて、異名に付し名字也⁽⁷⁰⁾。

「鷺」の姓を用いたのは、宗玄の父で同じく狂言をよくした三之丞の代からであった。そのいわれは、三之丞の首が生まれつき長く、磯島という水辺に住んでいたことにあるという。ここからも、磯島では文化的な素養が育まれていたことを見出すことができる。

さらに、井原西鶴が天和二年（一六八二）に刊行した文芸作品ではあるものの、「左に天野川、磯嶋といへるにも舟子の瀬枕、しのび女有所ぞかし」とみえるように、かつての磯島には遊女がいたという説も伝わっている⁽⁷¹⁾。つとに網

野善彦氏が指摘したように、中世において所属の不明確な境界部分は公的な場として機能し、様々な人々が集う都市的な空間が発生しやすい。⁽⁷²⁾そして、そのような無縁の地には、芸能民や遊女も集ってくる。わずかな事例しかあげることができなかったが、淀川を介して不特定多数の人々が出入りする文化的サロンであった磯島も、それに類する性格を有していたことが読み取れよう。またこの性格が、翻って磯島が川中島であることを裏付けているともいえる。

おわりに

本稿では、中世から近世にかけての淀川と天野川の合流点付近の流路を復原的に考察してきた。その結果として浮かび上がってきた磯島の川中島としての景観については、さして目新しい成果とはいえないかもしれないが、地勢に伴う歴史的な性格についてはこれまで知られていない側面も指摘できたかと思う。

また、文献史料から読み解いたかつての磯島の地形は、現在の地形とある程度重ね合わせることができる。例えば、街村状に延びる茶屋町の西側に沿うように、現在も悪水路が残っている。これこそ、淀川のかつての河岸であろう。そして、茶屋町から京街道のT字路を曲がって西へ進むと、この悪水路を渡って磯島の集落へと入る。これも、かつて鶴峯らを通った道なのではなからうか。以上のように、地図を活用してフィールドワークを繰り返せば、より詳細に地形を復原することも可能である。

同様に拙著でも、多角的な視野を確保するために様々な素材は用いているが、論証の過程では文献史学の方法にこだわっている。相手方の方法論は知識としては知っていても、その方法論の世界で自身が鍛えられたわけではないので、踏み込むことに躊躇しているという側面もそこにはある。学際的な交流は歓迎すべきことだが、他分野へ踏み込む際には、相手方の方法論を身につけておくことが大前提だと考えているからである。おそらく、多くの研究者はそうであ

ろう。

ところが、限られた範囲の地域史になると、少し事情が異なってくる。すなわち、自身の方が地理に詳しいとか、長くその地と関わっているとかが、相手より長けていると勝手に思い込んでしまうのである。『私心記』の該当部分の解釈に必要なのは、文献史料を批判的に読み込む能力のほかにないと思われるが、質問者は筆者の解釈には金属器生産に関する知識が足りなさすぎると批判する。質問者いわく、全国の「金屋」地名を把握していないと、この一文は正しく解釈できないらしいが、文献史学の立場からそのように考える者はほばいないと思う。おそらく、自らが越境して隣接する分野に踏み込んでいるという意識がほとんどないため、聞く耳を持たずにこのような発言を繰り返してしまうのであろう。

とりわけ文献史学は、一応は文字が読めた気になってしまったため、まともな訓練を受けていない者による越境が、比較的されやすい分野といえる。⁽⁷³⁾そして、ルールを弁えない相手を一々相手にしてはきりがないため、文献史学ではそれらを放置する場合がほとんどであったと思う。いわば、無視することで黙殺するのである。ところが、その放置された説に行政などの公的機関が便乗することによって、誤った地域史が定着していく場合も多い。⁽⁷⁴⁾拙著では、そのような事例をいくつか紹介したうえで、警鐘を鳴らしたつもりである。

筆者は、何も自由な発言を認めないというわけではない。むしろ、正解が一つとは限らないのが人文学なので、相応の場で自由な発言に基づく議論は必要だと考えている。しかし、適切なプロセスを踏まえないければ、荒唐無稽な解答ばかりが無数に増えていき、明確な誤りを次から次に生み出してしまうだけである。こうした環境を正常化していくためには、誤った歴史が生成され定着していく過程について、できるだけ多くの事例を文献史学やその周辺分野の研究者が共有することで、それに類する安易な発言を慎むように心がけるとともに、明確な誤りを極力放置しないことも大事だと考えている。極めて卑近な事

(38)「日野家書札雜集」(宮内庁書陵部藏)。

(39) 「日野家雑文書」(宮内庁書陵部蔵)。

(40) 「日野家雑文書」に所領の書上部分のみが写される。日付は、国立史料館編『寛文朱印留』下(東京大学出版会、一九八〇年)一六頁の寛文印知による。前掲註(21)『枚方市史』一三二頁によると、磯島村の一部が河床となつてしまつたため、慶安四年(一六五二)に日野家領一四石八斗五升七合と石清水八幡宮領三石六斗八升の替地が渚村のうちに与えられる。「日野家雑文書」に従えば、さらに日野家領での悪所が拡大したため、寛文五年(一六六五)の寛文印知までに、山城国愛宕郡田中村と同国紀伊郡吉祥院村で替地が与えられている。『旧高旧領取調帳』にあげられる石高は、前者で四〇石五斗二升六合、後者で五七石四斗となつてゐる。これによつて、磯島村での日野家領は前掲註(34)で示した数値に確定した。なお寛文印知では、磯島村の知行分と「大塚村葭嶋」の間に、替地にあたる渚村分の知行を挿入したため、混乱が生じてゐる。

(41) 「存覚上人一期記」嘉元二年五月五日条(龍谷大学仏教文化研究所編『龍谷大学善本叢書』三、同朋舎出版、一九八二年)。なお、『大日本史料』第六編之三七、二三頁では、ここでの磯島を近江に比定するが、「存覚上人一期記」観応元年七月六日条に「摂州磯島」とみえることから摂津に比定するのが妥当と思われる。この例については、日野照正「初期真宗の展開」(仲尾俊博先生古稀記念会編『佛教と社会』永田文昌堂、一九九〇年)も参照されたい。

(42) 『尊卑分脉』第二篇二一八頁・二五五頁。

(43) 「存覚上人一期記」嘉元二年八月一日条・貞和二年一月条・観応元年七月六日条。

(44) 前掲註(25) 拙稿。

(45) 『高槻市史』第四卷(二)三二〇頁〜三二四頁。

(46) 拙稿「蝦夷の首長アテルイと枚方市」(前掲註(1) 拙著、初出二〇〇六年)。

(47) 前掲註(21) 井上著書一三〇八頁。

(48) 枚方に入寺した実従は、『私心記』永禄三年四月一九日条を初見として、同年四月二四日条・五月四日条・八日条・二四日条・二九日条・三〇日条・六月一日条・五日条にみえるように、鶯合を頻繁に見物し始める。そして、自らもそれに参加するために、『私心記』永禄三年一〇月二日条・二四日条・十一月一日条・四年二月一二日条にみえるように、鶯を捕りに行くようになる。その捕獲の場合は、「岡」もしくは「大塚・磯嶋」であつた。これらは、天野川沿岸や淀川沿岸の無主の地であつたのではないかと思われる。また、禁猟の場である「金屋」での捕獲事例がないことにも留意したい。

(49) 「天正拾九年撰津一国高御改帳」(『地域史研究―尼崎市立地域研究史料館紀要―』

第八巻第三号、一九七九年)。この史料の年代については、八木哲浩「撰津一国高御改帳の年代考証」(同上第三巻第三号、一九七四年)。

(50) 正保郷帳は、「延宝四年四月『撰津国郡村々高帳』一冊―『撰津村日々高書』写」(『関西学院史学』第一号、一九五二年)による。慶安四年に河床となつたのは、前掲註(40)で述べたように日野家領と石清水八幡宮領の計一八石五斗三升七合である。幕末の村高は前掲註(34)。

(51) 磯永和貴「西宮市立郷土資料館蔵『慶長十年撰津国絵図』の描写内容と表現様式」(『人文地理』第四八巻第六号、一九九六年)。

(52) 『鹿苑日録』第三巻・第四巻の三六〜四七が鶴峯宗松の日記に該当する。

(53) 『鹿苑日録』慶長四年六月二八日条・八月一日条・十一月一日条・五年四月二七日条・六年四月二九日条・五月四日条・九年一〇月九日条など。

(54) 『鹿苑日録』慶長四年九月五日条・六日条・九年七月二四日条・九月二七日条・一〇年正月一八日条・九月一六日条・一七日条・十一月二三日条・一一年正月二二日条・十一月一日条・二二日条。

(55) 『鹿苑日録』慶長四年七月一日条・五年五月一日条。

(56) 『鹿苑日録』慶長四年九月二二日条・二二日六日条・五年正月一〇日条・七年正月二三日条など。

(57) 『鹿苑日録』慶長六年一二月一六日条・一一年三月二二日条。

(58) 『鹿苑日録』慶長一二年八月一三日条。観音堂の所在については、前掲註(21)『枚方市史』三六九頁による。

(59) 『鹿苑日録』慶長四年六月二八日条・六年正月二四日条・一五年二月一日条。

(60) 『鹿苑日録』慶長六年正月一四日条・一二月二四日条・七年一〇月二二日条・八年五月二九日条・一一年一二月一九日条。

(61) 『鹿苑日録』慶長九年一〇月八日条・一一年二月五日条。

(62) 『鹿苑日録』慶長四年六月二八日条・五年二月九日条。

(63) 『鹿苑日録』慶長四年一二月二日条・六年正月一三日条・二四日条・七年二月七日条・八年一二月二二日条。

(64) 『鹿苑日録』慶長七年一〇月二二日条。

(65) 『鹿苑日録』慶長六年一二月二三日条・九年一〇月一八日条・一一年七月七日条。

(66) 『鹿苑日録』慶長六年一二月一六日条・一一年三月二二日条・一二年八月一三日条。日野資勝の子で、輝資の孫にあたる慈性も、のちに大坂から京都へ上る際に、「イソ嶋へ人ヲヨセ、人足ヲ一人ヤとひ弁当を持せ候」と、磯島の住人を雇つてゐる(『慈性日

記』寛永四年一〇月二日条)。

(67) 『私心記』永禄三年二月二十八日条。

(68) 拙稿「楠葉郷の石清水八幡宮神人と伝宗寺」(前掲註(1)拙著、初出二〇〇六年)。

(69) 小林貢「鷺流の成立と仁右衛門宗玄」(同『狂言史研究』わんや書店、一九七四年)。

(70) 笹野堅校訂『わらんべ草』(岩波書店、一九六二年)三四七頁。

(71) 『好色一代男』卷三。

(72) 網野善彦『無縁・公界・楽』(平凡社、一九七八年)。

(73) この問題については、拙稿「アテルイの『首塚』と牧野阪古墳」(『志学台考古』第二〇号、二〇二〇年)も参照されたい。

(74) この問題については、拙著『椿井文書―日本最大級の偽文書』(中央公論新社、二〇二〇年)も参照されたい。